

他者の信頼性判断に及ぼす孤独の影響^{1),2)}

—笑顔・真顔の他者に対する高信頼者・
低信頼者の評価—

原田知佳*

The Effect of Isolation on Judgments of Trustworthiness: Judgments of High-Trusters and Low-Trusters on Partner's Faces of Smiling and Nonsmiling

Chika HARADA*

The aim of this study is to explore the effect of isolation on judgments of trustworthiness through partner's facial information (smiling/nonsmiling) with taking into account individual differences of general trust. An experiment using Trust Game was conducted. In isolation condition, participants were told that they were likely to end up alone later in life. The results showed that participants allocated half of money for partner in isolation condition, regardless of general trust. In addition, male decreased trust behavior in isolation condition than control condition, whereas female increased trust behavior in isolation condition than control condition.

key words: isolation, trustworthiness, general trust, smile

問 題

近年、振り込め詐欺をはじめ、他者への信頼を逆手に取った詐欺事件が多発している。詐欺事件の被害者に高齢者が多い原因として、加齢に伴う認知機能の低下が指摘されているもの(永岑・原・信原, 2009)、年齢や高次脳機能と騙されやすさとの直接的な関連は低いことが報告されている(八田・八田・岩原・八田・永原・伊藤・藤原・堀田, 2015)。詐欺事件の被害者の特徴には、高齢者が多いということ以外に、被害者の7割が1人暮らしや夫婦で居住していることも報告されており(警視庁, 2012)、孤独・孤立といった要因にも目を向ける必要があると考えられる。Maner, DeWall, Baumeister, & Schaller (2007)では、孤独を喚起すると、他者との接触願望が強まったり、他者を好意的に評価したり等、社会的な繋がりを再構築しようとする動機づけが高まることが報告されている。他者との繋がりを構築するためには、他者への信頼が前提に存在すると考えられることから、孤独を感じると他者を安易に信頼してしまう可能性が推察される。そこで、本研究では、孤独状況に着目し、信頼ゲームを用いて、孤独を喚起させた状況における他者の信頼性判断について検討を行う。

なお、他者一般を信頼する傾向には個人差があり、一般的信頼の個人差によって信頼性判断は異なる(山岸, 1998)。また、表情は信頼性のシグナルとして機能することが指摘されており、真顔よりも笑顔の相手がより信頼されることが報告されている(e.g., Scharlemann, Eckel, Kacelnik, & Wilson, 2001)。したがって、本研究では評価者の一般的信頼、および、相手の表情(笑顔・真顔)についても要因に含めた上で、孤独が信頼性判断に及ぼす影響を検討する。

具体的には、次の2つの仮説を検証する。上述のManer et al. (2007)の知見より、孤独を喚起された条件では、他者を信頼する傾向が高まることが推測できる【仮説1】。また、低信頼者は、高信頼者と比べて、他者のポジティブ情報に敏感に反応して他者を信頼する可能性が示唆されている(林・与謝野, 2005)。本研究で扱う“笑顔”もポジティブ情報の一つとみなせる可能性があることから、低信頼者は、高信頼者に比べて笑顔の相手をより信頼する可能性が推測できる【仮説2】。なお、信頼行動には性差の存在が報告されており、男性はリスク嗜好が高いため、女性よりも信頼行動を示しやすいことが報告されている(Wang & Yamagishi, 2005)。こうした性差が孤独状況においても確認されるのか否かは未検討であることから、性差を要因に組み込んだ検討も探索的に行うこととする。

方 法

対象者 大学生92名(男性48名, 女性44名; $M_{age}=19.42\pm1.26$)

刺激と実験計画 日本では、笑顔表出の頻度が高い女性が相手である場合に、真顔より笑顔の方が信頼されることが報告されていることから(大藪・森本・中嶋・小宮・渡部・吉川, 2010)、女性5名の笑顔と真顔の顔写真を信頼ゲームの相手として提示した。顔写真は、Lyons, Akamatsu, Kamachi, & Gyoba (1998)によって用いられたJAFPEデータベースより、予備調査で、笑顔の強度および自然さが高く、顔写真の信頼性と魅力度が極端ではないものを選択して用いた。実験は、表情を参加者内要因とする2(真顔・笑顔)×2(孤独・統制)×2(信頼高・低)×2(男性・女性)の4要因混合計画で行われた。顔写真の提示順序はカウンターバランスを取った。

手続き 実験参加者は事前に一般的信頼尺度(山岸, 1998)に回答し、理論的中央値をもとに高信頼者・低信頼者に分類された。その後、孤独操作と信頼ゲームの2部構成の個人実験が行われた。

孤独操作: Twenge, Catanese, & Baumeister (2002)の操作³⁾を元に、実験参加者はアイゼンク性格検査(岸本, 1987)に回答した。孤独条件には、テストの結果と偽り、将来孤独な人生を過ごすことになるといった孤独を喚起させる文章を、統制条件には性格検査の得点を提示した。

信頼ゲーム: 大藪他(2010)、神・田中(2009)を参考に、以下のような流れで行った。まず、別室にいる相手と簡単なゲームを行うことが伝えられ、提供者役である実験参加者と分配者役である相手にそれぞれ900円が与えられた。実験参加者は分配者に提供する金額を決定し、提供額は相手に渡ると実験者によって3倍にされるということが伝えられた。分配者は、3倍にされた提供額と自らに元々与えられた900円を「2人が同じ額になるよう平等に分配する」か「自分1人で独占する」かのいずれかを選択できることが伝えられ、相手が平等に分配すると信頼できるならば、お金を預けた方が得になる状況

¹⁾ 本研究は、著者の指導のもと、小山美咲氏(平成25年度名城大学人間学部卒業)が名城大学人間学部へ提出した卒業論文のデータを元にしており、著者が再分析してまとめたものである。データを提供してくれた小山美咲氏に謝意を表します。

²⁾ 本研究は、東海心理学会第64回大会にて発表された。

* 名城大学人間学部

Faculty of Human Studies, Meijo University, 4-102-9 Yada-minami, Higashi-ku, Nagoya 461-0048, Japan
E-mail: haradac@meijo-u.ac.jp

³⁾ 当該操作は多数の先行研究で繰り返し用いられており、操作チェックを行わずとも十分な妥当性があると見なされている(e.g., Twenge, Baumeister, DeWall, Ciarocco, & Bartels, 2007)。

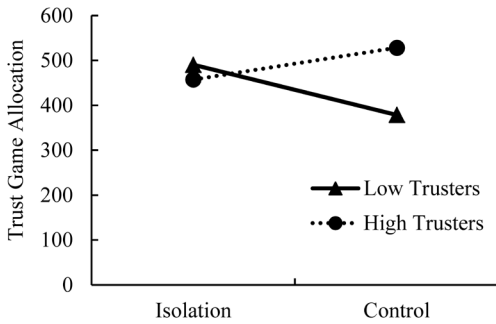


Figure 1 Interaction between isolation and general trust

だった。また、実験参加者が提供額を決定する際には、分配者役の顔写真が参考として提示され、渡された封筒に分配者に預ける金額を100円単位で入れるよう教示した。このとき、取引の結果によって謝礼額が変わることが伝えられ、真剣な判断を行うよう促した。2試行(笑顔・真顔)終了後に実験者は封筒を回収し、その後ディブリーフングが行われた。

結果および考察

仮説1・2の検証および性別の影響を探索的に検討するため、2(真顔・笑顔)×2(孤独・統制)×2(信頼高・低)×2(男性・女性)の分散分析を行った。その結果、孤独の主効果は有意ではなかったものの(F(1, 84)=.35, n.s.)、孤独×一般的信頼の交互作用に有意傾向が示された(F(1, 84)=3.00, p=.09)。統制条件で高信頼者は低信頼者よりも提供金額が多い(F(1, 84)=3.56, p=.06)という結果は、一般的信頼尺度で測定した個人差が信頼ゲームの結果にも反映されていることを示すものである。一方で、孤独条件では高信頼者と低信頼者に有意差が示されず(F(1, 84)=.24, n.s.)、提供金額の平均値は持ち分である900円のおよそ半額の値を示していた(Figure 1)。孤独状況では、一般的信頼の個人差の影響が消失し、持ち分の半額を分配するよう動機づけられるのかもしれない。以上より、仮説1は支持されなかったものの、孤独状況が、一般的信頼の個人差と信頼行動との関連を調整することが示唆された。なぜ孤独状況によって一般的信頼の個人差の影響が消失するのかといった点については今後検討していく必要があるだろう。

また、表情×一般的信頼の交互作用は有意ではなく(F(1, 84)=2.53, p=.12)、仮説2は支持されなかった。笑顔がポジティブ情報としてみなされなかった可能性が考えられる。なお、本研究では表情の影響が確認できなかった。日本人は、目周辺の笑顔強度や笑顔の左右対称性が信頼性判断に影響を与えることが報告されている(Ozono, Watabe, Yoshikawa, Nakashima, Rule, Ambady, Adams, 2010)。本研究で用いた刺激が、その点を統制できていなかったために再現されなかった可能性が考えられる。

信頼行動の性差に関しては、性別×孤独の交互作用が有意であった(F(1, 84)=5.08, p<.05)。統制条件において男性は女性よりも提供金額が多い(F(1, 84)=5.49, p<.05)という結果はWang & Yamagishi (2005)の知見と合致する(Figure 2)。また、女性は孤独条件で提供金額が増えることが確認された(F(1, 84)=3.99, p<.05)。女性は男性に比べ親和欲求が強いことから(Wong & Csikszentmihalyi, 1991)、孤独状況に陥ると、人との繋がりを求めてより他者を信頼しやすくなる可能性があるのかもしれない。当該知見は、詐欺被害者の7割が女性であること(警察庁, 2015)と合致するものの、女性は長寿であるが

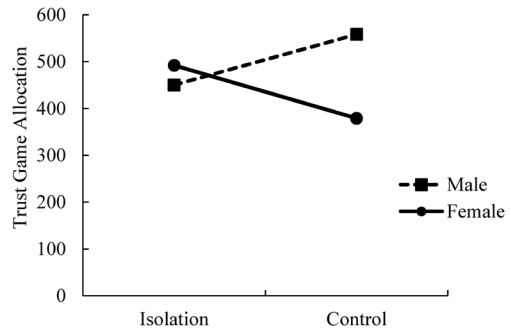


Figure 2 Interaction between isolation and gender

ゆえに高齢の被害者になりやすいこと、騙す側が男性よりも女性を対象としやすい可能性など、他の要因も絡んでいると考えられるため、今後さらなる検討が必要である。

引用文献

八田武俊・八田武志・岩原昭彦・八田純子・永原直子・伊藤恵美・藤原和美・堀田千絵 2015 中高年者における高次脳機能、信頼感と騙されやすさの関連 心理学研究, 85, 540-548.
 林 直保子・与謝野有紀 2005 適応戦略としての信頼: 高信頼者・低信頼者の社会的知性の対称性について 実験社会心理学研究, 44, 27-41.
 神 信人・田中寿夫 2009 信頼が報われる条件 心理学研究, 80, 123-130.
 警視庁 2012 詐欺被害に遭った高齢者等に対する調査結果について <http://www.keishicho.metro.tokyo.jp/anzen/image/chosa1031.pdf> (2016年1月31日)
 警察庁 2015 特殊詐欺の認知・検挙状況等について(平成27年1月~11月) <https://www.npa.go.jp/toukei/index.htm> (2016年1月31日)
 菊池雅子・渡邊席子・山岸俊男 1997 他者の信頼性判断の正確さと一般的信頼—実験研究— 実験社会心理学研究, 37, 23-36.
 岸本陽一 1987 日本版アイゼンク性格検査(EPI)の信頼性に関する研究 近畿大学教養部研究紀要, 18, 1-12.
 Lyons, M., Akamatsu, S., Kamachi, M., & Gyoba, J. 1998 Coding facial expressions with gabor wavelets. *Proceedings, Third IEEE International Conference on Automatic Face and Gesture Recognition*, 200-205.
 Maner, J. K., DeWall, C. N., Baumeister, R. F., & Schaller, M. 2007 Dose social exclusion motivate interpersonal reconnection? Resolving the "porcupine problem." *Journal of Personality and Social Psychology*, 92, 42-55.
 永岑光恵・原 壘・信原幸弘 2009 振り込め詐欺への神経科学からのアプローチ 社会技術研究論文集, 6, 177-186.
 大園博記・森本裕子・中嶋智史・小宮あすか・渡部 幹・吉川佐紀子 2010 表情と言語的情報が他者の信頼性判断に及ぼす影響 社会心理学研究, 26, 65-72.
 Ozono, H., Watabe, M., Yoshikawa, S., Nakashima, S., Rule, N. O., Ambady, N., & Adams, R. B., Jr. 2010 What's in a smile? Cultural differences in the effects of smiling on judgments of trustworthiness. *Letters on Evolutionary Behavioral Science*, 1, 15-18.
 Scharlemann, J. P. W., Eckel, C. C., Kacelnik, A., & Wilson, R. K. 2001 The value of smile: Game theory with a human face. *Journal of Economic Psychology*, 22, 617-640.
 Twenge, J. M., Catanese, K. R., & Baumeister, R. F. 2002 Social exclusion causes self-defeating behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 606-615.
 Twenge, J. M., Baumeister, R. F., DeWall, C. N., Ciarocco, N. J., & Bartels, J. M. 2007 Social exclusion decreases prosocial behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92, 56-66.
 山岸俊男 1998 信頼の構造—ところと社会の進化ゲーム— 東京大学出版会
 Wang, F., & Yamagishi, T. 2005 Group-based trust and gender-difference in China. *Asian Journal of Social Psychology*, 8, 199-210.
 Wong, M. M., & Csikszentmihalyi, M. 1991 Afliation motivation and daily experience: Some issues on gender differences. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 154-164.

(受稿: 2016.2.5; 受理: 2016.8.17)